

曾於文藝

うたごよみ

俳句

末吉俳句会

参道の土やはらかに草芽吹く

児玉 典子

大鳥居集ふ笑顔の初句会

原口 冴子

鳴ききつて寒禽森を研ぎゆけり

泊 康

大陽俳句会

菜の花の牧の柵より牛の顔

福村 よう子

やわら日に山茶花の咲く小径かな

逆瀬川 節子

天晴や射手は白寿の弓始

岩重 みどり

短歌

末吉短歌会

初春の入江を渡る「春の海」

琴のしらべに稚魚も跳ねおり

大森 巳喜生

題 字

末吉文化協会会員 瀬戸口 淳民氏

分け入って熊手購ふ緋袴の
巫女ら立ちゐる里の社に

平田 美穂子

平穩に過ぎるといいね、ゆで卵
つるんと剥いて焼き塩まぶす

泊 康

大陽短歌会

郷を問わば「ふもと」と返事の来るような
嬸の話す薩摩語ゆかし

西山 美代子

朝焼けに染まる川面にそれぞれの
水脈くきやかに鴨ら遊べる

広川 ミドリ

酔とザラメうす口しょう油と大根の
漬けもの習う湯船の中に

川辺 敦子

財部短歌会

明日こそと思いつ生きし月の数々
犬の遠吠えへ除夜の鐘鳴る

永岡 冴子

頬伝ふ涙は熱くとめどなく
反田恭平奏でるシヨパンに

脇丸 洋子

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

賽銭な 大概大概入れつ

願げば大と 古川 一幹

大概な奴 仕事ちや無器用で
口ちや達者 浜田 一好

半人前大工 大概な仕事で
一日分 胡摩ヶ野 べぶまつ

鈍び頭脳 九十坂で
後退い 鈴木 一泉

大陽薩摩狂句会

茶飲れ婆い コーヒを遣れば

苦げち言つ 津留 群志

断いの 言訳じやしたか

苦げ新茶 小倉 りんりん

損ぬした 苦げ経験が

肥料しなつ 西山 美代子

効つたげな 首も縮んだ

苦げ菓 境 すやすや